

今あらためて新島襄の炯眼(けいがん)を思う

百合野 正 博

奨励者紹介〔ゆりの・まさひろ〕

同志社大学商学部教授

〔研究テーマ〕説明責任、情報公開、および監査の重要性

勤めに聞き従い、諭しを受け入れよ。
将来、知恵を得ることのできるように。

(箴言 19章20節)

ルビが必要な

今回のテーマ

今年度末に定年退職する私にチャペル・アワーで話す機会が与えられました。キリスト教文化センターに心より感謝します。

今日のテーマの中の言葉「炯眼」に「けいがん」とルビが振られています。私は、漢字にルビが振られているのを見ると、戸板康二『ちょっといい話』(文藝春秋 1978年)に出てくる新島先生に関する次のくだりを思い出します。

「新島襄がある時、勝海舟を訪問して、『日本にも耶蘇教の学校を建てたいと思います』といった」という書き出しの「新島襄」に「にいじまのぼる」とルビが振られていたのです。当時の人気作家児島襄(こじまのぼる)からの連想ではないかと想像して直ちに抗議の手紙を書いたところ、幸い次の版で修正されました。

先の文章は次のように続きます。「海舟は新しいものに好奇心を持っている人だったので、すぐ膝を乗り出して、『何年で建ちますか』と尋ねる。『さア、二百年というところですか』と答えたと言えられる。同志社はもう少し早くできた」。

今日はこのエピソードに関連したテーマでお話ししようと思っていましたので、最初から「けいがん」という言葉をキーワードにするつもりでした。ところが「けいがん」には「炯眼」と「慧眼」の二つの漢字があります。どちらも「物事を見抜く力」という意味ですが、「慧眼」には「将来を見通す力」という意味もあって、当初はこちらの方がいいように思えました。しかし、話の内容をいろいろと考えた末に「炯眼」を使うことにしました。その理由は最後にお話しします。

同志社大学での学生生活

1969年春、私は同志社大学商学部に入学しました。東京大学の入試を中止に追い込んだ大学紛争は関西にも飛び火しており、本学でもシュプレヒコールや怒号の飛び交う騒然とした毎日が続きました。やがて、バリケードストライキやロックアウトのために講義が行われなくなりましたが、私たちの学生生活にはほとんど変化がありませんでした。当時の大学生は「専門書を読み、自分の頭で考え、議論すること」が大学での勉

強だと思っていたので、講義にはあまり出席しなかったからです。その代わり、聴く価値のある講義は真剣に聴きましたし、評判の講義があると聞けば京都大学や立命館大学まで遠出しました。最近のように「登録した講義には出席するけれども、本は読まないし議論もしない大学生」は、私に言わせれば高校4年生です。

岡林信康が同志社時代を振り返り、今出川に来てボクシング部の練習をして生協でご飯を食べて帰る毎日だった、と言うのを聞きましたが、私も似たようなものでした。ちょっと極端に言えば、ゼミや語学・体育実技以外の講義にはほとんど出席せず、会計学研究会の例会に出て議論をして酒を呑んで麻雀やビリヤードに興じて家に帰ったら本を読む毎日でした。全国から集まってきたクラスメートは2浪や3浪もザラで、刺激に富んだ毎日を過ごしました。私は、今出川キャンパス全体にあふれる一人ひとりの学生を一人前の大人として扱う同志社の自由な雰囲気を感じて、大学生であることに満ち足りていました。

しかし、そのような日々は4回生の秋に終わりました。公認会計士になるために商学部に入った私は、在学中に合格しなかったという現実を突きつけられて11月にはストレスによる十二指腸潰瘍穿孔で救急車搬送される始末。2月の試験になんとか合格した大学院で、遅ればせながら同志社がナミの大学ではないことに気づくことになりました。

当時の大学院と

いうところ

この当時の大学院は二つの顔をもった特別なところでした。私の書いた研究計画書の下書きに朱を入れる祖父の誇らしげな顔や、町内のお年寄りの「百合野さんとこのまーちゃんは同志社の教授にならるんやて」という噂話に象徴されるポジティブな印象とは裏腹に、現実の大学院は、将来の保証がないまま研究に明け暮れるおっさん連中のたむろする「二度と普通の人生には戻れない」（と思われていた）特異な時空だったのです。

公認会計士試験に再挑戦するための腰掛として大学院に進学した私にとって、この二つとも自分とは関係ない話だと思っていましたが、主治医から「潰瘍を再発させないために受験勉強とお酒は1年間禁止」と宣告された瞬間に自分に降りかかった大問題となり、心機一転、本来の大学院生としての生活を始めることにしました。

当時の商学研究科の講義は教授と院生がほぼ1対1で全科目がゼミのレベルでした。学部では「仏の〇〇」と愛称されていた教授が「鬼の〇〇」と化して毎回山のように宿題を出し、囑託講師の有名教授からは質問攻めにされるため予習に追われる毎日。ネットによる情報収集の存在しなかったこの時代、宿題と予習はもっぱら大学院図書館と至誠館書庫で時間と格闘する毎日でした。そして今、思い返すと本当に不思議なことに、私の研究スタンスは修士論文を完成させるプロセスで「通説にNOを突きつける」ものとなりました。

まさに新島先生が、卒業生は政治家になっても宗教家になってもかまわないけれど「かの優柔不断にして安逸を貪り、苟くも姑息の計を為すが如き軟骨漢には決してならぬこと」（森中章光編「片鱗集」『新島襄集』7 丁字屋書店 1950年）と切望された研究者になっていったのは、今出川キャンパスがパワースポットだからではないかと真顔で振り返っています。

同志社で育まれた

研究者としてのスタンス

研究者になってからもことごとく通説に疑問を投げかける研究テーマを選び、御用学者の真逆を行くイバラの道を歩みました。たとえば、経営者不正を摘発防止できない公認会計士監査は世の中の役に立たないと主張したのはエンロン事件が起こる前だったので、学界では無視されました。公認会計士は地方自治体や国の監査にも積極的にかかわるべきだと言っても、会計士業界はいまだに聞いてくれません。

私の考え方が間違っていないと確信したのは、通算2年半以上を過ごしたイギリス留学でした。この当時、会計学者はアメリカに留学したのですが、私はイギリスに行きました。そして、お上を恐れないイギリスの大衆を目の当たりにし、イギリス国民が大きなパワーを有していることと、イギリスで芽生えて発達した会計士監査とが密接に結びついていることに気づいたのです。イギリスは、説明責任(アカウンタビリティ)を負っている人つまり会社社長や政治家、説明を受ける権利を有している人つまり株主や国民、そして説明の中身をチェックする人つまり会計士、それぞれが説明責任の重要性をハッキリ自覚している社会でした。その根幹の部分に、自分たちこそが主権者であることをはっきりと自覚しているイギリス国民がいたのです。

このことに気づいた時、私は唐突に新島先生を思い出しました。安中藩江戸屋敷という狭いエリアで育ったために「天は四角い」と思っていた新島先生が『連邦史略』を読んで「將軍の子が將軍になるのではなく、將軍を国民が選ぶ国をこの目で見てみたい」と強く思い、アメリカに密出国して実際に自分の目でアメリカ社会を見て、「自治自立した人民の養成」や「一国の良心ともいべき人物の養成」の重要性に気づいたのと同じ経験をしているのではないかと感じたのです。

そして、帰国してからは監査論の研究と並行して新島研究にも力を注ぎ、同志社を創立した新島先生の強い思いが、実は会計・監査と深い関係を有していることを鮮明に理解するに至りました。私の監査論研究は同志社でなければなしえませんでした。

新島先生の期待した自治自立した国民をつくるのに必須の要件は教育でしたが、それに加えて、国民が意思決定するのに必要かつ十分な正しい情報の公開と入手が必須なのです。ここで無理やり新島襄と会計・監査を結びつけているようですが、そうではありません。先にも言いましたように、会計や監査は企業の財務内容の公開だけではなく、国やそれ以外の情報の公開とチェックとも密接に関連しており、いい社会を作るためには必須のシステムなのです。

新島先生の強い思いと

失望

封建社会を説明する際によく使われるにもかかわらず、間違った解釈がなされる論語の一節があります。「民は、之に由らしむべし、之を知らしむべからず」です。本来は「民衆に為政者の政策の意味を理解させることは非常に難しいので、民衆の良心を信じて信頼させる以外にはない」という意味ですが、「封建社会では民衆に情報を与えないで、ただお上の言うことに従わせる」と解釈されることが多いですね。新島先生は、江戸時代が終わり近代国家となった日本にアメリカ型の民主主義社会を作るためには教育の果たす役割が大きいと考え、同志社を創設しました。ところがすぐに失望したのです。

私の考える新島先生の失望の原因は三つありました。一つは高等教育の二極化でした。国家のために働

く官吏を養成する東京大学とそれ以外の大学との間には決定的な格差があったのです。私学の学生は徴兵年齢に達するとすぐに兵役につかなければならなかったのに、東大生は兵役を猶予されました。また、明治維新は中央集権の官僚国家で、ひとり人が大切に扱われませんでした。この時代の日本の男子は、大きくなったら兵隊さんになってお国のために死ぬ、なんてまるでISのようです。そして、富国強兵の掛け声のもとに消耗可能な国民を増殖させるための国民教育が行われました。これらの現実を目の当たりにして、新島先生は失望したのだと思います。

新島先生は、古賀鶴次郎という同志社の学生に宛てた手紙に「君等宜しく改革家となりて、此の不潔なる天下を一掃し賜へ」（同志社編『新島襄書簡集』岩波書店 1954年）と書き残しています。新島先生が勝海舟に同志社の完成まで200年かかると答えたのは、このような不潔な日本社会が変わるためにはそれくらい長い年月が必要だという意味だったと私は考えています。

今の日本社会の現状

同志社創立145年が経過した今、新島先生が嫌悪した日本の不潔な天下は一掃されたでしょうか。「モリカケ問題」は権力による利益誘導の存在を白日のもとに晒しましたが、大山鳴動しただけでそれっきり。「財務省による記録の隠蔽・改竄・破棄」は民主主義の先進国では決して許されない重大犯罪にもかかわらず、忖度したことの責任を取った人は皆無です。「インチキな第三者委員会」の設置によってさまざまな事実がうやむやにされ、いつの間にか一件落着が宣言される事例が続出しています。ついには、教科書で習った「三権分立」が絵に描いた餅にすぎず、行政とくに官邸が立法と司法を支配している現実を突きつけられています。しかし、主権をもっているはずの私たち国民には何もできていません。

新島先生の失望の三つの原因は、今はどうでしょうか。高等教育の二極化は今も継続中です。最近タチが悪いのは、東大を出て司法試験に合格したり高級官僚になったりした人たちのレベルの低さが目に余ることでしょう。中央集権の官僚国家は敗戦をまたいでもなお継続中で、上から目線で中央が地方を見下す光景を何度もニュースで見せられています。さらに、ゆとり教育は終わりましたが、高等教育を空洞化させる文部科学省の政策に変化はないようです。

今の日本では、粉飾決算をした社長も嘘をつく政治家も、責任を取りません。ではどうすればいいのでしょうか。良心に従って粉飾決算しない社長を選ぶ、良心に従って国民のための政治をする政治家を選ぶ。これに尽きるのです。

新島襄の炯眼を思う

先ほども言いましたように、新島先生は、将軍の子が将軍になる国ではなく、選挙で将軍を選ぶ国を見たいと思ってアメリカに密出国しました。

それから150年以上たった今の日本は、確かに将軍の子が将軍になる国ではなくなりました。しかし、将軍（総理大臣）の孫を選挙で将軍（総理大臣）に選ぶ国になってしまいました。次の総理大臣にふさわしい人を選ぶアンケートでは、総理大臣の子どもがいつも上位に入っています。2世や3世の政治家は数え切れないほどいますから、日本は結果的に将軍の子どもが将軍になる国なのです。主権在民を標榜しているにもかかわらず、結果的にはそれを放棄してしまっているようです。

でも、ここで知っておかなければならないことがあります。それは、主権在民の「民」の字は「瞳のない目を針で刺す様」を描いた象形文字で、目を針で突いて目を見えなくした奴隷を表すそうです。これから派生して、「目の見えない人のように、物の分からない多くの人々、支配下に置かれる人々」の意味になりました。口クでもない漢字ですね。

そのような状況をどのように打破すればいいのでしょうか。それは、正しい情報を入手して、新島先生のように「考えて行動する」ことが何よりも大切なのだということです。同志社で学ぶ若い諸君は、新島先生の考えた大学教育とは一体何なのかということも、一度考えてほしいと思います。そして、「良心を全身に充満させた人間にならなければならない」というところに行きあたってほしいと思っているわけです。

ここで「炯眼」という漢字を使った意味をお話したいと思います。もしも「慧眼」を使ったのだとしたら、新島先生には「将来を見通す力」が備わっていたことになります。そうなると、先生が理想とした日本社会の完成まで今からまだ55年もかかることになってしまいます。この数年にわたる日本社会の閉塞感がまだ半世紀以上も続くとしたら、今の学生諸君は一生浮かばれないではありませんか。そうではなく、新島先生が炯眼をもって見抜いていた日本社会の問題点をそろそろみんなが気づき、半世紀を待たなくても社会が変わることを期待したいのです。

そのためには、「良心が全身に充満した卒業生を社会にたくさん送り出したい」という新島先生の強いメッセージを同志社人一人ひとりが心に留めることが改めて求められていると申しあげて、今日のメッセージを終えたいと思います。

[参考文献]

J・D・デイヴィス 『新島襄の生涯』 北垣宗治訳 同志社校友会 1975年
新島襄全集編集委員会編 『新島襄全集』I 同朋舎出版 1983年

2020年1月15日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録